日本軍の遺棄毒ガス兵器

中国人被害者は訴える

高 暁燕（カオ シャオイエン）◎著

山辺悠喜子・宮崎教四郎◎訳

◉明石書店

〈著者紹介〉

高　暁燕（カオ　シャオイェン）

1958年ハルビン市に生れ、ハルビン師範大学卒。現黒龍江省社会科学院歴史研究所、副研究員。中国東北地方史の研究に従事。

「第二次世界大戦時期日本化学戦準備」、「踏訪死亡山谷」、「戦争的危害没有消失」、「難以撫平的歴史創傷」等の文章を発表した。

1995年、ハルビンで行われた「陽光下的悪魔—侵華日軍化学戦罪行展」の企画、及展示に参加する。

日本軍の遺棄毒ガス兵器
—中国人被害者は訴える

定価はカバーに表示してあります。

1996年8月15日　第1刷発行

著　者　© 高　暁　燕
訳　者　山　辺　悠　喜　子
　　宮　崎　教　四　郎
発行者　石　井　昭　男
発行所　株式会社 明　石　書　店

〒113　東京都文京区湯島2-14-11
電　話　03（5818）1171
FAX　03（5818）1174
振　替　00100-7-24505

組版・印刷所　美研プリンティング㈱　製本所　越後堂製本㈱

ISBN 4-7503-0833-1

日本軍の遺棄毒ガス兵器

中国人被害者は訴える

高 暁燕（カオ シャオイエン）◎著

山辺悠喜子・宮崎教四郎◎訳

◉明石書店

推薦のことば

黒龍江省社会科学院副院長

歩　平

第二次世界大戦が終結してすでに五〇年が経過した。この半世紀に及ぶ歳月で我々の充足した生活は、あの戦争が人類に与えた傷痕を癒す時間を持った。

しかし、残念なことに、五〇年後の現在我々が現実の世界に直面するとき、人類社会は依然として新しい衝突や、戦争や騒乱を見るばかりか、驚いたことに半世紀前にすでに終結したはずのあの戦争がもたらした災難が未だに解決していないのを見いだす。旧日本軍の化学兵器の使用および化学兵器の遺棄も未解決の問題のひとつだ。

日本軍が戦争中、国際条約に違反して化学兵器を使用した責任に関しては、正義を守る多くの人たちが追及しており、善良な人たちは数十年前の歴史の問題にすぎないと思うかもしれない。現実に大量の遺棄された化学兵器という、大きな危険が依然として中国人民の生命の安全と生活環境をひどく脅かしている。これは決して単なる歴史の問題ではなく、厳しい現実である。中国は領土の広い国なので、日本軍の遺棄した化学兵器の範囲も相当広範だ。北は黒龍江岸の黒河、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

孫呉、南は広東省の広州市まで、もちろん都市でも農村でも、また山中でも河の中でも、戦後いたるところで日本軍の化学兵器が発見されており、また毒ガスによる傷害事件も発生した。ここに紹介する事実は、戦後の数千例の被害者中ごく僅かに過ぎない。

この記録は著者の被害者に対する極めて深い関心によって、誠実に行われた実地調査の記録である。私達はこの一文により、毒ガス傷害による貧困、痛苦、死に瀕している人、あるいはすでに死んでしまった人たちの呻吟と号泣を聞くことができる。私は歴史学者としてかつて、旧日本軍の化学戦と遺棄した化学兵器の傷害の問題を研究したことがある。思うに、ふつうの同情心があるなら、なお継続している危害を前にして手をこまねいていられるはずはない。同時に人びとが危険と苦痛から逃れる方法を考えられるはずだ。

あれらの今なお戦争の責任を認めようとしない人たち、あれらの今なお被害を受けた国家に対して率直な謝罪をしたくない政治家たちは、このような事実を前にしてどんな感想をもつだろうか。

まえがき

一九三七年、日本の帝国主義は乱暴にも中国全面侵略戦争を引き起こした。戦争中の中国軍民の死傷者は三五〇〇万人以上にのぼる。直接、間接の財産の損失は五六二〇億元以上になる。中国人民に対しはなはだ大きな罪を犯した。特に問題なのは、この戦争中に日本軍は通常兵器で中国人民を殺戮したばかりでなく、世界の批判を踏みにじって、かねてより国際社会によって禁止されていた生物、化学兵器を戦争に使用し、中国侵略戦争中最も暗黒かつ残忍な一ページを歴史に書き入れたことだ。しかし戦後の東京裁判ではアメリカの操作により日本軍の生物、化学兵器使用にたいして姑息な手段を使って、結局調査をうやむやにし、その罪業は徹底して清算されなかった。

戦後数十年のうちに、中日両国の学者の共同の努力で、まず生物兵器の使用、すなわち細菌戦について研究が深まり、日本の七三一部隊の秘密のベールが基本的にはがされ、その罪業が白日の下にさらされた。近年日本では「七三一部隊展」が巡回展示され、広く民衆、とくに青少年たちによってこの中国侵略の事実が理解され、この暗い歴史が永遠に記憶されたことは、たいへん

重要な意義があった。

日本軍が中国で化学兵器を使用し毒ガス戦を行なったことについての研究は始まったばかりである。この方面では、日本の学者の粟屋憲太郎、吉見義明両先生を代表として一九八〇年代中期以降大量の調査と研究が行なわれて、喜ばしい成果をあげられ、この領域の研究の先駆者となられた。中国の紀学仁先生と歩平先生も調査と研究を深め、ともに専門の著作を刊行されて、この問題について新しい段階を画された。一九九五年夏ハルビンで開催された「戦争に反対し、平和を擁護する座談会」では、中日の学者が日本の中国侵略戦争中の化学戦問題について突っ込んだ研究討議を行ない、今後の中日両国の研究者が直面する主要課題について認識が一致した。それは、日本側では原資料の発掘・整理と戦争中の証人の調査を重点とし、中国側では被害者の統計と調査を重点とするものだった。

一連の仕事を終えて、その結果に驚かされる。不完全な統計だが、全中国侵略戦争中日本軍は少なくとも二〇〇〇回以上毒ガスを使用し、その範囲は一九省区にも及び、九万四〇〇〇余人の死亡者を出した。さらに、日本軍は敗戦の際あわてて逃げたので、国際公約に違反して化学兵器を使用した罪業を隠蔽するため、大量の未使用化学兵器を中国の領土に遺棄した。初歩的な統計によると、毒ガス弾およそ二〇〇万発、毒剤一〇〇余トンが遺棄されて中国の人民に巨大な災厄の種を遺した。関係方面の調査によると、戦後五〇年間で二〇〇〇余人が日本軍の遺棄した毒ガス弾で毒剤傷害を受けた。これらの化学兵器は中国に遺棄されてすでに半世紀がたち、長期の腐

食で毒液が砲弾から、あるいは容器から溢れ出、土地、水源を汚染し、人類に毒害を及ぼしている。

一九九三年一月十三日、国際間で「化学兵器禁止条約」が締結された。そのなかの第一条第三項に「各締約国は本規定に基づき他の締約国の領土上に遺棄した化学兵器を廃棄する」とある。私たちはすべての平和を愛する人たちと一緒に、日本政府が歴史と現実を直視するよう促し、できるだけ早く国際条約の規定する義務を履行して、化学兵器廃棄の作業を早く開始することを期待している。

ここに記載するのは、筆者が調査した日本遺棄毒ガス弾、毒剤被害者の実情であり、これら罪のない被害者の苦しい呻きは私たちを目覚めさせる。私たちの行動で平和を守り、このような悲劇を再び繰り返させてはならない。

日本軍の遺棄毒ガス弾
『日本の中国侵略と毒ガス兵器』
〈明石書店〉地図に加筆・訂正
□……既に遺棄化学兵器の破棄処理または暫定処理を行なった地区
■……破棄処理を行なっておらず、状況が比較的明らかな地区
▲……処理を行なっておらず、数量も未確定な埋設地域
△……初歩的調査を行なった埋設可能地区
●……著者が訪問した地域
ロシア連邦
ハバロフスク
黒河
孫呉
黒竜江
ハイラル
依安
[黒龍江省]
フラルキ
チチハル
双陽
ジャムス
大慶
松花江
ハルビン
モンゴル人民共和国
牡丹江
長春
ウラジオストク
敦化
[内蒙古自治区]
[吉林省]
錦州
瀋陽
[遼寧省]
張家口
朝鮮民主主義人民共和国
北京
天津
平壌
大連
[河北省]
[山西省]
北坦村
石家庄
ソウル
大韓民国
[陝西省]
済南
[山東省]
青島
黄河
西安
[河南省]
[江蘇省]
福岡
中華人民共和国
[湖北省]
[安徽省]
南京
上海
武漢
(揚子江)
長江
[浙江省]
[湖南省]

日本軍の遺棄毒ガス兵器／目次

—中国人被害者は訴える

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

推薦のことば――歩平 3
まえがき――5
序章　歴史の検証―北疃虐殺発生地の実地調査――15
1　凶悪残忍な罪業 15
2　幸いにも生き残った李徳祥さんを訪ねる 18
3　烈士霊園の参拝 29
4　深い悲しみのなかで考える 31
第1章　調査はここから始まった――37
1　日本軍の中国侵略遺跡のなかの毒弾坑 37
2　毒弾処理の証人孫作敏さん 43
3　黒河の毒剤被害者 46
第2章　ハルバ嶺―呻吟する山谷――59
1　日本軍が遺棄した毒弾処理の顚末 59
2　毒弾溝体験記 66
3　尽きない苦しみを訴える 71

第3章　悪魔部隊が残した毒物――77
1　「関東軍化学部」を訪れる　77
2　彼は実際行動によって反省を表した　85
3　五一六部隊が残した災難　93
4　中国第一重型機械集団公司供応処の中毒事件　99
5　フラルキの被害者と　103

第4章　松花江に隠されていた毒魔――117
1　悲劇の発生　118
2　彼らは病苦のなかで悶える　125
3　怒りの訴え　131
4　厳しい現実を前にして　139

第5章　毒剤が市の発展建設を邪魔する――143
1　「私は毒ガスの被害者です」――仲江さんの発言　143
2　病弱な孫文斗さん　151
3　貧しく孤独な邢世俊さん　157

4　外から来た民工の飽培宗さんと司明貴さん　163
5　中毒事件を目撃していた証人——程子儒さん　166
6　再び牡丹江を訪れる　169
付　中毒事件の発生地を調査する　181
第6章　鍛冶職人の悲劇——185
1　拝泉県中興郷で毒ガス弾が漏れた　185
2　依安県双陽郷の農民の不幸　193
第7章　五〇年を経て考える——205
1　又、尊い血の代償が支払われた　205
2　なんと！村中が砲弾だらけだ　207
補足資料——黄先生の記録——217
あとがき——235
訳者あとがき——237

日本軍の遺棄毒ガス兵器
―中国人被害者は訴える

遺棄毒ガス弾の被害者仲江さんと孫文斗さん（左より、第5章）

序章

歴史の検証——北疃（坦）虐殺発生地の実地調査

一九四五年八月一五日、日本は無条件降伏を通告し、人類社会にいまだかつてない大きな災厄をもたらした戦争が終結した。現在歴史の車輪は激しく回転してちょうど五〇年が経過した。五〇年後の今日、私達が過去を振り返ってもう一度戦後五〇年の歴史を見つめてみると、幾つかの事件の影響がかくも長くかつ深く、そして今日にいたってもまだ完結していないことに気づく。日本の軍隊が戦争中中国の軍隊、民衆に対し化学兵器を使用した問題がその一つだ。

（北疃は北坦とも書く）

1　凶悪残忍な罪業

一九四二年六月二六日、《晋察翼日報》は八路軍晋察翼司令部が世界に向かって発表した電報を伝えた。電報の全文は次の通りである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com